

「大分県のみかん温室では2割の燃料節約につながった」と話す矢野社長＝神戸市兵庫区和田山通1、ヤノ技研神戸ラボ



## 宝塚のヤノ技研

蓄熱空調システムを手がけるヤノ技研(宝塚市)が、農作物用の温室で保温効果高め、暖房燃料の節約につながるカプセル装置を開発した。カプセルの中に入れた特殊な化合物が昼間の温室内の熱を吸収し、夕方以降の気温低下に伴い、蓄えた熱を放出する仕組み。兵庫県立農林水産技術総合センター(加西市)との共同実験では、燃料費が従来より約26%減少したという。

(末永陽子)

# 温室向け蓄熱装置開発

## 燃料費26%カット 農家の負担軽減



矢野直達社長(71)はサラリーマン時代、大手機械メーカーで住宅用の蓄熱空調システムの技術開発を担当。電力会社や大学と連携し、57度×マイナスイオン16度の間の特定の温度で、熱を吸収すると液体から固体に変化し、熱の放出時に液体に戻る特殊な化合物を開発した。しかし、会社の業績悪化などを理由に、その化合物を使った製品開発は中止に。その後、「長年の夢を事業化したい」と、同社に許可を得て、技術特許を取得。定年退職後の2002年に会社を立ち上げた。

装置「エネバンク」は、1枚約860平方センチ、厚さ約3ミリ。昼間のため熱が夕方から夜にかけて放出し、この熱で温室の温度低下が緩やかになるため、暖房機の使用を減らすことができる。設定温度は原料の配合で調整できるという。約990平方センチの温室で、1500枚ほどを壁に貼

り付けたりつるしたりして使う。2月から有料でモニタ1農家の募集を始めた。2年後の本格販売を目指す。近畿経済産業局が優れた企業に与える「関西ものづくり新撰」にも選ばれた。

同社の年商は2千万円。従業員は5人。矢野社長は「田安の進行で原油価格が上がってきた。コスト高に苦しむ農家に試してもらいたい」と話している。